1部70円（税抜き）

対がん協会報

第671号　2019年（平成31年）1月1日（毎月1日発行）

公益財団法人 日本対がん協会　「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104－0061　東京都中央区銀座7－16－12　G－7ビルディング9階
☎ 03－3541－4771　FAX 03－3541－4783　https://www.jcancer.jp/

主な内容
2～3面　「サバボーテ・プログラム」開催
4～5面　がん相談ホットライン年報
8面　がん征圧デザインポスターコンテスト作品募集

2019年を迎えて

禁煙推進、検診研究、サバイバー支援 さらに充実、新たな飛躍も

公益財団法人 日本対がん協会会長　垣添忠生

明けましておめでとうございます。

日本対がん協会は昨年11月に設立60周年を迎えました。1958年の設立当初に比べ、がんを巡る我が国の状況は大きく変わりました。

まず、がんは治療できる病気に変わりつつあります。かつて5年生存率は40％未満だったのが、いまや60％を超えています。それに人口の高齢化、人口減少という国の基本を左右するような新しい事態が発生していることもご承知の通りです。国のがん政策も大きく様変わりしました。

何といっても2007年のがん対策基本法の施行と、16年のがん登録推進法の施行が大きいです。つまり国は二つの法律に根ざし、予算を投入して我が国のがん対策を進めようとしています。

日本対がん協会は民間で最大のがん検診、がん征圧団体であり、国と連携し補完し合いながらがん対策をしっかりと進める必要があります。医療費高騰を抑え、日本国民をがんから守るには、特に予防と検診に注力することが重要です。その意味で、我が対がん協会の役割は大きいのです。

予防の面では、米国メイヨークリニックと組んで、17年から3年間Global Bridgesと呼ばれる禁煙プロジェクトを進め、20年の東京オリンピック、パラリンピックを見据えて、我が国の禁煙推進活動を強力に展開しています。タバコ対策は当協会活動の原点の一つです。18年には全国大会で「タバコゼロ宣言」を公表しました。

また、当協会は設立当初からがん検診に熱心に取り組み、現在、全国46支部で年間約1200万人の検診を実施し、約1万4000人のがんを発見しています。我が国でもっとも信頼に足る検診機関と申せましょう。

これからのがん検診は人口の減少、高齢患者の増加、新しい診断技術の導入等、従来なかった事態に対応し変貌していく必要があります。我が国のがん検診に対して科学的根拠に基づいた提言をしていくために、支部が持つデータのデジタル化を進めます。各種の調査を省力化して集約していくため、対がん協会グループのご協力をよろしくお願い申し上げます。

当協会では、がんに一度でもなった人のことを「がんサバイバー」と呼んでいます。がんは誰もがなる病気なのに、実際にがんになると人は強い孤立感、恐怖にさいなまれます。17年6月に立ち上げた「がんサバイバー・クラブ」では「がん最新情報の提供」や「患者同士の交流の場」など、ネット空間と交流会のような、人と人とのリアルな対応を組み合わせた支援に取り組んでいます。最終的には自分と似た症状の例を検索できるシステムの構築が求められています。

それ以外にもリレー・フォー・ライフやピンクリボン活動、がん相談ホットライン、がん研究者に対する助成金交付、若手医師海外研修派遣、子どもに対するがん教育など、さらに強化し進めるべき課題は山積みです。これらの活動を支える原資は寄付ですから寄付額増額を目指した活動はきわめて重要です。

念頭にあたり、皆様のご理解とご支援を切にお願い申し上げます。本年が皆様にとって良き年でありますように。

がん相談ホットライン　祝日・年末年始を除く毎日
03-3541-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談（無料、電話代は別）に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」（☎03-3541-7830）を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談（要予約）
社労士による就労相談（要予約）
予約専用　03-3541-7835

日本対がん協会は医師による面接・電話相談と社労士による就労の電話相談（ともに無料、電話代は別）を受け付けています。予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までです。

医師による相談は電話が1人20分、面接は30分、社労士による電話相談は40分になります。詳しくはホームページ（https://www.jcancer.jp/）をご覧ください。

「サバボーテ・プログラム～Beauty&Talk」開催
きれいになって笑顔になれる力を体験

自然に笑顔に

古村さんを囲んで

きれいになって笑顔に

日本対がん協会のがんサバイバー・クラブは2018年12月20日、東京都中央区銀座の資生堂ライフクオリティー ビューティーセンターなどで、がん患者を対象に「サバボーテ・プログラム～Beauty＆Talk」を開催した。メイクで患者特有の美容上の悩みを解消して美しくなることを通じて笑顔になってもらおうという企画で、11人が参加した。

日本対がん協会ではこれまで、資生堂などの協力で、がん治療の副作用によるシミやくすみ、脱毛など、治療で生じる美容上の悩みがある方をプロの手でキレイになってもらう「ビューティースマイルプロジェクト」を毎年実施してきた。今回は資生堂とアートネイチャーの協力による新しい企画。

「サバボーテ」とはフランス語のCAVA（生き生き）とBEAUTE（美しい）を組み合わせた造語で、がんサバイバーにメイクによってキレイになり、自信を持ってどんどん外に出てもらおうとの思いが込められている。主催したがんサバイバー・クラブの横山光恒マネジャーは、この企画で参加者がキレイになって笑顔になるきっかけにしてもらい、その姿をSNSでほかのがん患者にも広げてほしい、と参加者によびかけた。

企画は２部制で、第１部では、資生堂ライフクオリティー ビューティーグループのメーキャップ アーティストによる、がん治療による外見の変化へのケアについての講義と、資生堂ビューティースペシャリストによるそれぞれの人に似合うパーソナルカラーの診断で、ヘアも含めたメイクを受け、キレイになることで笑顔になることを体感してもらった。

パーソナルカラーは、それぞれの人の肌の色と瞳（虹彩と瞳孔）の色をチェックして、調和する色を診断するもの

パーソナルカラーは

似合う色は

瞳の色は

似合う色を調べています

爪にやさしいネイルカラーの試用

で、参加者らは「がん治療中は外に出るのがおっくうになりがちだけど、似合う色がわかって明るい気持ちになれた」「がんになって、おしゃれしたいということを忘れがちだったのが、おしゃれしてみようという明るい気持ちになれた。参加者同士で話もできてよかった」などと語っていた。

アートネイチャーが提供しているお湯で洗い落せるネイルカラーの試用もされ、治療中で薄くなったり、でこぼこになったりする爪でも塗りやすいなどの声が出ていた。

参加者同士も打ち解けてスマホで写真を取り合い、SNSで発信し、コミュニケーションをつなぐ場にもなっていた。

女優古村比呂さんとトークで元気に

第２部は、メイクを終えた参加者らが、近くの東京銀座資生堂ビル11階のバー「Bar S（バーエス）」に移動し、2012年に子宮頸がんがわかり、再再発して現在は抗がん剤の治療を続けている女優・古村比呂さんとのトークが行われた。

バーのラウンジで参加者らが古村さんを囲み、参加者らが一人ずつ、自らのがん体験を語り、古村さんも自分の経験もふまえて質問したり、抗がん剤治療の副作用のつらさなどに声をかけたりしながら、想いを共有する時間を過ごしていた。

がんサバイバーカフェ　患者・家族がつながるSNS
がんサバイバー.net立ち上げへ　試行版で体験

日本対がん協会のがんサバイバー・クラブでは、SNSを使ってがんサバイバーや家族がそれぞれの体験談などを書き込むなどして交流できる「がんサイバー.net」の立ち上げ準備を進めている。2018年11月29日に東京都中央区銀座の日本対がん協会で開かれた患者交流イベント「がんサバイバーカフェ」では、その試行版の体験会が行われ、参加したがんサバイバーら15人から、最終版完成に向けての意見を聞いた。「がんサバイバー.net」は３月までには運用開始を目指している。

がんサバイバー.netは、「がん治療中、体力的に外出することがつらいときに自宅にいながら患者仲間と交流したい」「同じような病状や年代の仲間らの体験談を聞いたり、悩みを分かち合ったりしたい」といった思いを実現する新しいSNSで、がんサバイバー・クラブのサイト内に立ち上げる準備を進めている。

netに登録して、自分の病歴や体験談、患者会の情報などを書き込み、net内で公開できる情報を指定するなどして、経験を共有し、患者・家族同士がつながれるシステムを目指している。登録者同士でグループをつくることで、患者会などのイベントや講演会の企画が可能となり、その情報をがんサバイバー・クラブのサイト内のイベント情報に自動表示し、広く告知することもできる。また、自分の病状や検査数値を記録できるダイアリー機能もあり、病歴の表を作るなど、医師に自分の症状を手短に伝える資料作成もできる。

がんサバイバー.netの試行版が紹介されたがんサバイバーカフェ

自分の診察日や病状などの記録もでき、同時に仲間ともつながれることで、孤独な闘病生活にならないSNSを目指している。利用料は無料。

がんサバイバー・カフェの会場では、プロトタイプのシステムにスマートフォンやパソコンから登録してもらい、情報を書き込んだ人同士が「友だち申請」してつながることなどを試行し、使い勝手の意見をきいた。当日の意見などを反映し、完成版を目指している。

がん相談ホットライン2017年度年報

相談件数１万576件　４年連続で１万件超え

症状・副作用・後遺症の相談がトップ　２度目以上の利用も増加

看護師と社会福祉士による電話相談の「がん相談ホットライン」の2017年度年報がまとまった。「がん相談ホットライン」は、看護師と社会福祉士によるがん患者・家族支援事業で、「誰かに気持ちを聞いてほしい」「不安で仕方がない」など、医師だけではカバーできないような、患者や家族の幅広い悩みをサポートするために06年に開設された。17年度の年間相談件数は1万576件で、４年連続で年間１万件を超えた。17年度の相談件数1万576件は、月平均件数881件。前年度比は95.1％で、16年度よりは相談件数は減少した。17年11月に日本対がん協会の事務所が移転し、電話番号も変更になったことの影響もあるとみられる。

17年度の月別では６月が最も多く、がんの闘病生活を送っていた芸能人死去のニュースが影響したとみられる。

相談の内容では、１つの相談には複数の問題が絡んでいる場合が多いが、主な相談項目としては「症状・副作用・後遺症」が2772件（26.2％）で最も多く、「治療」が2152件（20.3％）、「不安などの心の問題」が2104件（19.9％）と続いた。「治療」と「不安などの心の問題」の順位が昨年度と入れ替わったが、前年度とほぼ横並びだった。

ただ、１人の相談内容の中で出てきた相談項目をすべて集計すると、「不安などの心の問題」が42.6％と最も多く、次いで「症状・副作用・後遺症」が36.2％、「治療」が27.4％となった。

２度目以上の利用が増加

相談者からの自己申告ではあるが、２度目以上の利用と答えた人は42.0％（4444件）いた。前年度の16年度は40.1％、15年度は36.4％、14年度は30.2％、13年度は25.7％と年々増えてきている。その要因の一つに、不安で話を聞いてほしいという相談が多いことがある。相談者からは「不安な気持ちを話すことで気持ちが落ち着く」という声が多い。患者が長く生活していく中で、治療や経過観察が終了しても不安や心配事が出てくることがあるため、相談回数の制限のないホットラインは利用しやすいとみられる。

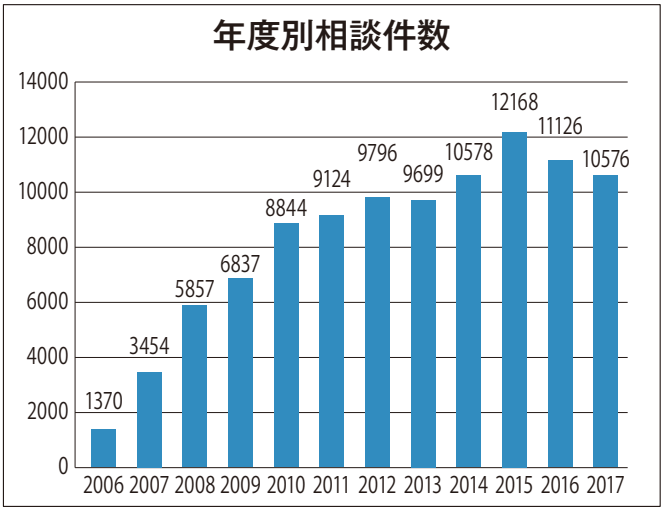
２度目以上の利用の仕方も様々で、継続的に何度も利用する人だけでなく、がんの疑いが生じた時、診断された時、治療選択の時など、様々な局面で利用する人や、親ががんになった時に利用した人が、自分ががんになって利用するというケースもあった。

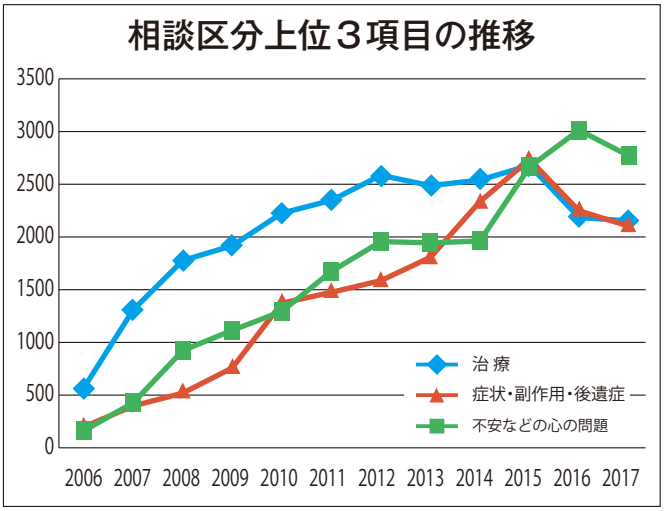
今年度相談員が気になった相談　目立つよろず相談

年報では、家族や周囲の人との関係や育児、介護、仕事など、がんになっていなくてもだれもが抱えるような悩みの「よろず相談」が最近増えてきていることを指摘した。しかし、相談者の話をよく聞くと、がんになったことやその治療によって身体的、精神的に変化があったり、生活の変更を余儀なくされたりしていて、誰もが抱える生活上の悩みがさらに難しくなっていることがうかがわれた。一方で生活上の問題をどこに相談してよいかわからず、ホットラインに電話してくる人が多いことがわかった。ホットラインでは、最初はがんとは関係ないと思われる相談でも、がんやその治療が影響している可能性を考え、じっくり話を聞くようにしている。

取り残されてしまう気持ち

がんは、診断されてから治療まである程度の流れが決まっていて、次々と進んでいくことから、状況がのみこめない内に治療の予定が決まっていくことに戸惑う人が少なくない。「ベルトコンベア式に進み、気持ちが取り残されていくようだ」「言われるがまま治療に乗ってしまった」と、本当はもっとよく考えるべきだったのではないかと悔やむ人もいる。医療者と話がしたくても、まずはだれに相談したらいいのかわからなかったことがうかがわれた。ホットラインでは、必要に応じてだれ



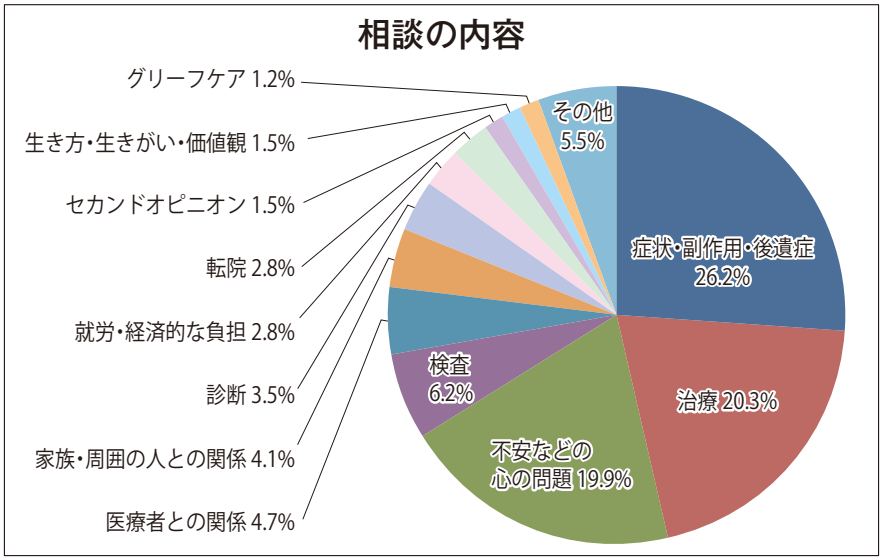


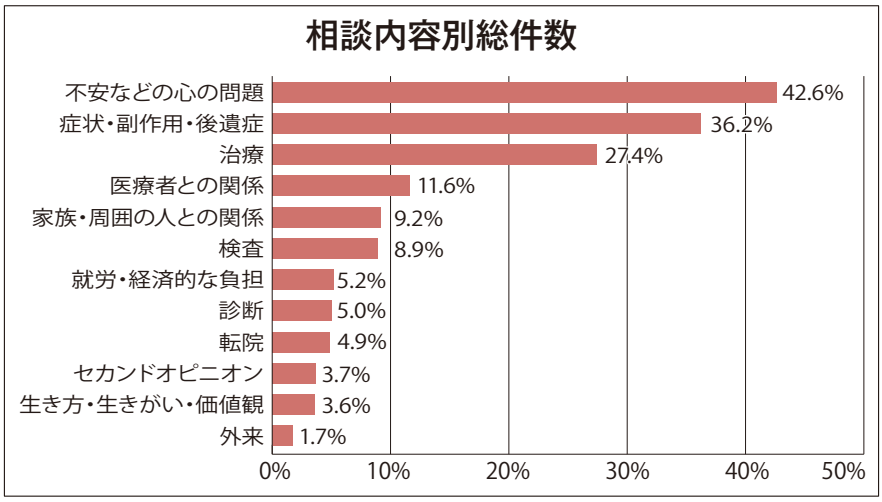
※2006、2007年度は相談区分が「診断・治療」

にどのように相談したらいいかなどを、気持ちに寄り添いながら共に考えるようにしている。

また、「抗がん剤で命を縮める」と誤解し治療を躊躇する相談がある一方で、治験を標準治療と同列の選択肢と考えたり、夢の最新治療と期待したりして相談してくる人もいる。ホットラインでは相談者の話をよく聞いたうえで、抗がん剤への誤解を解いたり、治験の情報を得る方法を伝えたりして、患者にとって最善なことは何かを考えられるように支援している。

また、今年度気になった相談の一つとして性交渉に関する相談も報告された。「性交渉でがんがうつることがあるか」「抗がん剤治療中でも性交渉をしていいのか」といった相談が件数は多くないが、幅広い年代からあった。ホットラインではがん自体が性交渉ではうつらないことを伝え、担当医に確認するように話している。同性で同年代の医療者の方が聞きやすいことをアドバイスしたり、どういう言い方をすれば聞きやすいかを一緒に考えたりしていることを紹介している。





がん対策にかかわる研究助成
黒川利雄がん研究基金　希望者募集

宮城県対がん協会は、がん予防および早期発見等の研究にかかわる若手研究者への助成を目的とした「黒川利雄がん研究基金」の2019年度の助成希望者を募集している。１件あたり100万円を限度に、総額220万円の助成を予定している。

対象とする研究は、①がんの疫学および集団検診に関する調査・研究・開発②がんの早期発見および治療に関する調査・研究・開発 ― の２分野。

応募資格は、がん予防や早期発見をはじめ、がん対策にかかわる研究に取り組む50歳未満の個人・団体で、宮城県対がん協会の理事か、応募を希望する個人・団体が所属する機関・組織の所属長の推薦が必要。応募は、１個人・１団体、または共同研究グループで１件とし、推薦件数も１人１件としている。

応募方法は、宮城県対がん協会のホームページ（http://www.miyagi-taigan.or.jp/）から申請書をダウンロードし、必要事項を記入して〒980－0011仙台市青葉区上杉５－７－30宮城県対がん協会「黒川利雄がん研究基金」事務局あてに郵送する。申請書類は、はがきか、FAX（022－263－1548）で取り寄せることもできる。問い合わせは☎022－263－1637へ。

応募の締め切りは３月末日。基金の運営委員会で審査し、結果を５月に発表して６月に交付を予定している。

黒川利雄がん研究基金は、宮城県対がん協会の初代会長、黒川利雄博士の遺志を受け、がん対策の長期的展望を開くために1989年に創設された。

2018年度までに119人に対し、総額7,790万円を助成している。

古本で日本対がん協会に寄付ができます
読み終えた本やDVDなどを活用しませんか？
charibon by VALUE BOOKS
詳しくは「チャリボン」 https://www.charibon.jp/partner/JCS/
（ISDNのバーコードがついた書籍類が対象です）
お問合せ（株式会社バリューブックス）：0120－826－295
受付時間：10:00－21:00（月～土）　10:00－17:00（日）

２人に１人ががんになる時代における「がん教育」とは
～愛知県での実践例を踏まえて
学校教育と社会教育を橋渡しできる仕組みを

日本対がん協会参事（禁煙推進・対がん事業開発）　望月 友美子

旭南中学校でのがん教育の講演

日本対がん協会は2009年に「がん教育基金」を創設し、がん教育の教材開発と普及、講師派遣等を行い、10年からはUICC（国際対がん連合）日本委員会の活動としても、子どもからのがん教育に関する多角的な討議に参画し提言活動を行ってきた。その後、16年の「がん対策基本法」改正で、国や地方公共団体には、がんに関する教育の推進のために必要な施策を講ずることが求められ、これを受けて文部科学省も学習指導要領を改訂し、小学校、中学校、高校でがん教育が20年度以降、順次、全面展開される予定だ。こうした状況を踏まえて、対がん協会が果たしうるがん教育における役割とは何か。18年11月に実施したがん教育の授業例を踏まえて私見を述べたい。

胃がん、大腸がん、肺がんなどでは高齢者の死亡率が高いが、近年若年化傾向にある乳がんや子宮頸部がんの死亡年齢はもっと若く、マザーキラーと言われている。学校教育におけるがん教育期間は小学校～高校のわずかな年数なので、生涯で２人に１人ががんになる「がんの時代」を生きるには、すべての年代で「がんの教育」（患者教育も含め）が求められ、社会教育として継続する仕組みが必要である。

「がん」を親も教師も大人も教えられていない中で、がん教育の場として想定されている学校は、時間・機会・人材・資源・教材が不足しており、海外では対がん協会のような民間団体や患者団体が人材や教材を開発し無償で提供しているが、日本ではまだその体制は十分ではない。

しかし一方で、子どもたちは、家庭や地域から様々な情報を収集し、繋いでいく力を持ちうる存在である。一方的に教えられたり与えられたりする存在から、自らが考えを深め発信し与える存在になることができる。これまで、がんの研究、がんの教育について考えてきて、私は、がんの教育は、次の12の柱に突き詰められると思っている。

①生命の神秘（生まれるということ）
②生命には限りがある（死ぬということ）
③そうならない性質を持つようになったものが「がん」
④いろいろな原因で「がん」は自分の細胞からできること
⑤顔が違うので敵として免疫細胞が攻撃する（戦う）
⑥戦いを生き延びて増えると体のあちこちに飛んでまた増える
⑦しかし小さいうちに早く見つければ（検診）治せる
⑧大きくなっても手術や薬や放射線で治せるようになってきた
⑨いま治せないがんも治せるように医学の研究が進んでいる
⑩健康的なライフスタイルを選べる力を身につける
⑪がんの原因で避けられる危険を避ける力を身につける
⑫がんになった人の気持ちを理解して支える力を身につける

最後の３つは子どものうちから「できること」で、子どもから大人まで共通だが、子どもがその力を身につけることが、がん教育の当面のゴールではないかと思う。

子どもたちが行動する力を主眼とした教育を

国際対がん連合（UICC）が世界的に行っているワールドキャンサーデー（２月４日）のキャンペーンでは、16年～18年のテーマとして「We Can, I Can（みんなでできる、ひとりでもできる）」を採択し、「がんは予防できる」「がん対策に投資を行おう」などの19のメッセージを展開した。18年11月、愛知県知多市立旭南中学校で、全校生徒を対象にがん教育の特別講演を行った際に、知識編としては日本対がん協会作成の「がん読本」とがん検診のリーフレットを配布し、親子で読んでもらい、講演会の事前事後アンケートとして、生徒にUICCの19メッセージの一つを選んで、その理由を答えてもらった。

中学校１年生であっても、予防や検診の重要性はもとより、医療人材の育成や健康への投資が重要など、それぞれのメッセージの意味を理解していることが分かった。単に知識教育に留まらず、子どもたちが知恵として身に着け、行動する力を主眼とした教育こそが、がんに負けない社会、がんと共生できる社会をつくっていけることを実感している。

今後は、日本対がん協会・支部グループとして、国内外の教材や実践例を体系化して、学校教育と社会教育を橋渡しできる新たながん教育の開発を行うことも必要だと思う。

ゴルフイベントによるピンクリボン運動　今回で14年目

ピンクリボンチャリティ金贈呈式

ジュピターゴルフネットワーク株式会社

左から、岡橋さん、上原さん、坂野常務理事、尾崎さん、鈴木さん

CS放送ゴルフ専門チャンネル「ゴルフネットワーク」を運営しているジュピターゴルフネットワーク株式会社（東京都江東区）は、2018年12月19日、東京・千代田区のジュピターテレコム本社で『ゴルフネットワーク ピンクリボン チャリティゴルフ2018 トークショー＆贈呈式』を開催した。「ゴルフネットワーク」では、CSR活動のひとつとして、毎年ピンクリボン運動を続けている。18年はチャリティレッスンとチャリティゴルフが行われ、イベントを通じて寄せられた1,159,125円が日本対がん協会に寄付された。

この日は、まず、プロゴルファー・上原彩子さんのトークショーに続き、金谷多一郎プロ、青木瀬令奈プロからのビデオメッセージの上映とプレゼント抽選会があった。

上原プロは公式インスタグラムや写真を交えて今シーズンを振り返り、2003年のプロ入りから続けているピンクリボン運動やその他のチャリティ活動についても紹介。「検診して何もなければ安心。選手のみんなを巻き込んで活動を広めたい」と、検診やチャリティ活動への思いを述べた。

続いて、ムービープラス・女性チャンネル♪LaLaTV・チャンネル銀河が共同企画・制作した、乳がんのセルフチェックのための「おっぱいチェック体操」という番組に出演している、現役女子プロレスラーの尾崎魔弓さん、元アイドルレスラーのキューティー鈴木さん、乳がん啓発運動士の岡橋優子さんが登場。おっぱいチェック体操が上映され、女性アスリートの健康管理や、乳がんについての基礎知識などが話された後、ゲストと会場の参加者が一緒におっぱいチェック体操を行った。初めてこの体操を見て、やってみた上原プロは、「楽しくできたので、みんなに広めていきたい」と感想を述べた。

贈呈式では、日本対がん協会の坂野康郎常務理事が上原プロから寄付金の目録を受け取り、日本対がん協会からは感謝状を贈った。この日の模様は、12月29日にゴルフネットワークで放映された。

また、上原プロには、12月７日、日本対がん協会（東京都中央区）で、「ゴルフを通じ継続寄付で乳がん啓発に貢献」した功績を称え、日本対がん協会創立60周年記念の特別感謝状も贈呈された。

約６６００人が啓発活動に参加

2018年度ピンクリボンフェスティバル報告会

フェスティバルの活動報告をする中島マネジャー

ピンクリボンフェスティバル2018（主催：日本対がん協会、朝日新聞社など）の報告会が2018年12月13日、東京中央区の朝日新聞東京本社レセプションルームで開催された。協賛企業や支援団体などから約25人が参加して、今年度の取り組みを報告した。

主催者を代表して、後藤尚雄・日本対がん協会理事長が「2003年にスタートさせた乳がんの予防・検診の啓発と、患者家族の支援を目的にしたピンクリボンフェスティバルの活動は、今では全国に広がり、主な都市のランドマークがピンク色染まるなど、大きなうねりとなりました。今年は天候不順が心配されましたが、東京、神戸で６千人もの方が参加されました。これも皆様のご支援の賜物です」と協賛企業や支援団体への感謝の言葉を述べた。

その後、ピンクリボンフェスティバル運営委員会事務局プロデューサーの中島盛荘・日本対がん協会マネジャーが今年度の活動内容を紹介。スマイルウオークは東京で3600人、神戸で2096人、若い女性を対象にしたピンクリボンセミナーには200人、シンポジウムには650人が参加したことが報告された。

シンポジウムの参加者は97.8％が女性で、50代の参加が４割を超えていた。また、乳がん経験者が６割、「家族や知人に体験者がいる」が２割近くを占めていた。参加動機としては「新しい乳がん治療の知識を得たい」という人が８割を占めていた。

一方、スマイルウオークの参加者は、40代と50代で約半数を占め、男性が東京では23.3％、神戸では27.6％おり、幅広い層が参加していた。参加動機としては、「友人・知人・同僚などに誘われて」が最も多かった。参加回数では４回以上という人が東京で26％、神戸で31.2％を占め、このイベントが定着してきていることが紹介された。

また、報告会では小西宏・日本対がん協会がん検診研究グループマネジャーが「企業を取り巻くがん検診と受診率向上を目指す日本対がん協会の取り組み」と題して講演。会社で受ける職域のがん検診の実施については法的な裏付けがないため、精密検査の結果を把握していないところが多いなど、職域のがん検診の問題点を解説した。

遺贈セミナー開催 3月9日には大阪でも開催予定

講演する中山氏

2018年11月30日、東京・千代田区の有楽町朝日スクエアで日本対がん協会主催の「遺贈セミナー」が開催された。毎年、東京と大阪で開催しており、6回目となる今回は約40人が参加した。

「遺贈」とは、遺言によって、自身の財産の受取人や内容を指定すること。相続人だけでなく、相続人以外も財産の一部またはすべてを譲ることができる遺贈は、社会貢献のひとつの手段として注目されている。ここ数年、自分の死後に財産をがん征圧に役立ててほしいという遺贈を希望する問い合わせも増えてきている。40年ぶりに相続法が改正され、財産をどう残すかを考えている人も増えていることから、セミナーでは、弁護士の中山二基子氏が「老いに備える～相続・遺言・遺贈について考えてみませんか～」をテーマに講演し、相続をどうするか、遺言をどうするかなどをわかりやすく解説した。

講演で中山氏は、亡くなった後のことは自分ではできないため、「相続をどうするのか」「自分の死後の対応を誰に頼むのか」「認知症が出たらどうするのか」など、自分ではできないことについて、元気なうちに備えておく「老いじたく」の必要性をまず説明。弁護士としての相談で、「遺産を兄弟には渡さず、社会に役立てるにはどうしたらよいか」「死後の事務を誰に頼むか」といった相談が目立ってきたといい、死後の事務を遺言で書いておくことを勧めた。

さらに、子どもがなく、夫が遺言を書かずに亡くなったため、夫の兄弟、甥や姪など22人が相続人の対象となり、対応に苦慮した妻の相談例などを紹介。面倒をみてくれた親族に報いたり、社会に役立てたい思いを生かしたりするには、遺言が大切であることを強調した。そのうえで、実際に遺言を書くときの留意点を紹介。「元気でしっかりしているうちに準備をする」「人生の集大成として遺言を考える」「すべての遺産を対象とする遺言にする」「遺言執行者を指定しておく」ことなどを解説し、社会貢献のための遺贈先の例も示した。

セミナーの最後に岡本宏之・日本対がん協会事務局長は「日本対がん協会を皆様の遺贈先の候補の一つにしてもらえれば」とあいさつした。

「遺贈セミナー」は3月9日に大阪でも開催される。

デザインの力でがんを減らそう！

第7回がん征圧ポスターデザインコンテスト 作品募集

日本対がん協会では、高校生以上の学生を対象に「がん征圧ポスター」のデザインを募集します。若い世代の新鮮な感性とアイデアでがんの早期発見、早期治療を呼びかけ、デザインの力でがんに苦しむ人を一人でも減らしてください。

最優秀賞の作品はポスターにして全国の自治体や保健所、医療・検診機関などに約5万枚掲示し、副賞として10万円を贈呈します。ぜひご応募ください。

エントリー及び作品募集期間　2019年1月16日～3月25日

作品テーマ　「がん検診に行こう」

応募資格　高校生・大学生・大学院生・短大生・専門学校生
グループ応募も可（ただしメンバー全員が応募資格を有していること）

贈　　賞　最優秀賞1点：ポスター化し、約5万枚掲示します。副賞　賞金10万円
優 秀 賞3点：副賞　賞金1万円

主　　催　公益財団法人日本対がん協会

応募方法　コンテスト公式サイト（http://www.jcsposter.com）でエントリーのうえご応募ください（応募の詳細は同サイトでご確認下さい。公式サイトでのエントリーの開始は1月16日から）

お問い合わせ　日本対がん協会（Tel：03－3541－4771）広報担当

第6回の最優秀賞作品